たからもの

阿部 奏大［愛媛県］

おじいちゃんは、僕に会うたびにいつも折り鶴を一羽くれる。僕が折り鶴をくれる意味を知ったのは、高校生になってからだった。

僕の記憶にはないけど、おじいちゃんは僕が産まれてすぐの頃から折り鶴をくれていたらしい。幼稚園児や小学生の時には、おじいちゃんが優しい笑顔で『ほれ、かなた折り鶴じゃ。』と言って渡してくれていたことをはっきり覚えている。小さい頃は僕を喜ばせるためにしてくれていると思っていた。しかし、それは違うんじゃないかと中学生になった僕は感じていた。

中学生になると、折り鶴にお小遣いを挟んで渡してくれるようになった。内心、

「お小遣いは嬉しいけど、中学生にもなってまだ折り鶴くれるんだ。」

と思っていた。しかし、不思議に思ってはいたものの、折り鶴をくれる時のおじいちゃんの笑顔が僕は大好きだったので、いらないなんて思うことはなかった。

高校生になったある日、おじいちゃんに会いに行った。もちろん折り鶴をくれた。僕は高校生になった今でも折り鶴をくれる理由を知りたくなって、おじいちゃんに聞いてみた。するとおじいちゃんは、

「かなたに会うのがわしは嬉しいんじゃよ。だから折り鶴を渡して、形としても思い出に残しとるんじゃ。」

と少し照れくさそうに言った。僕は不器用なんだなあと思いながらも、心が温かくなって自然と笑顔になっていた。その後おじいちゃんの部屋に呼ばれたので行ってみると、そこには色とりどりの折り鶴がたくさんあった。おじいちゃんは僕に渡していた折り鶴と同じ色で同じ数だけ折っていたのだった。

今、僕とおじいちゃんの部屋にはそれぞれ624羽の折り鶴がある。この折り鶴は、不器用で照れ屋だけどとても愛が詰まった、おじいちゃんと僕をずっとつないでいてくれる、世界で一番大切な『たからもの』だ。